

◆東京ニューシティ管弦楽団
第42回定期演奏会

ブライトコプフ社新版によるベートーヴェン交響曲全曲演奏の掉尾を飾り、内藤彰が出版されたばかりの「第九」の世界初演に挑んだ。前座はヘンレ新版による「エグモント」序曲。

休憩を挟んで、いよいよ交響曲第9番二短調合唱付き（高橋薫子、永井和子、望月哲也、西田昭広、合唱：東京合唱協会他）第1楽章は81小節の木管は旧版のまま。再現部直前のティンパニが16分音符になっているくらいでペーレンライター版の過激さからは却って後退してしまい穏健になった感じ。結局、完全に目新しい箇所は第2楽章トリオの終わり辺りで弦の二分音符が推敲前に戻したのか全音符になっていることぐらいだったが、演奏は素晴らしく、新しい「第九」を創出するのだという意欲漲り、管と少数精鋭の声楽もピカ一。この年の「第九」の中でも出色の出来だったろう。アダージョの快速調もノンヴィブラート奏法にはピッタリで、フィナーレは超特急のアラ・マチアといい、前進性に優れ、一気呵成に突っ走った。（12月29日、東京芸術劇場）（浅岡弘和）

「音楽現代」2006年3月号

3 / 17
fri

今日一日をもっと知りた
東京ニューシティ管弦楽団／第44回定期演奏会

作曲家の意図に、より近いテンポや音の表情を求めて、使用する楽譜選定に心をくわけて指揮者、内藤彰。ドイツのブライトコプフ社新版のベートーヴェンの交響曲全曲演奏も去年12月でサイクルが完成し、好評を博した。

さて、〈新世界交響曲〉と人気を二分するドボルザークの〈第8交響曲〉だが、内藤はこの曲でも「2005年ブライトコプフ社新版」を採用しての演奏だ。初版楽譜の出版元がロンドンのノヴェーロ社だったので〈イギリス〉というニックネームで呼ばれることもある曲だが、内容はドボルザークの祖国ボヘミア色が濃厚で、ボヘミアの自然とそこに暮らす民族の喜怒哀楽や祭りが表現されている。〈自然交響曲〉の呼び名もあるほどだ（三省堂：クラシック音楽作品名辞典）。

新版は旧版とどこが違うのか。内藤彰によれば、一例として、チェロ、クラリネット、ホルン、ファゴットによる冒頭のあの憂いを秘めた旋律は、強弱表示が旧版ではチェロだけがmf（メゾフォルテ）で、ほかのパートはp（ピアノ）である。新版は同様に表示しながらも、自筆譜では全パートpになっていることを注釈し、指



江澤聖子



内藤彰

揮者に判断を求めているようだ。全パートがpとなつて、あの懐かしさを誘う旋律が遠くから聞こえてくるように始まったら、ずいぶんと雰囲気が変わるだろう。

こういうマニア好みの議論はさておいても、〈ドボ8〉は、実に素晴らしい名曲だ。緩徐楽章とは決して静かな楽章ではないと認識させてくれる、第2楽章の輝かしく雄大な響き。哀しみと喜びが交錯するような歌と踊りの第3楽章。そしてドラマティックな終楽章と、どこをとっても感動的な音楽。

有名な〈モルダウ（ウルタヴァ）〉はもちろん、江澤聖子をゲストに呼ぶショパンの祖国ポーランドへの「告別」協奏曲でもある〈第1番〉なども、ニューシティの真摯な演奏で聴けるのが楽しみである。

〈モルダウ〉と〈ドボ8〉は、ボヘミアの大自然と民族の賛歌。内藤彰がドボルザークの自筆譜に迫る